

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04171

研究課題名（和文）移民の「ネーション（国民）」意識に関する研究 - 中国朝鮮族と在日朝鮮人を事例に

研究課題名（英文）Study on "nation" consciousness of the emigrant-Example consideration of Chinese Koreans and Koreans in Japan

研究代表者

鄭 雅英（Chung, Ah Young）

立命館大学・経営学部・教授

研究者番号：90434703

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中国朝鮮族と済州島出身の在日朝鮮人を事例に、移民の「ネーション」意識形成過程における国民国家の作用 自己を包摂・排除しようとする国民 国家に対する移民の対抗戦略を明らかにすることを旨とした。本研究を通じ、移民集団は国民国家と民族意識の狭間で独自の地縁血縁ネットワークを構成する、外的社会と折り合いをつけつつ生活世界を構成している実態の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

移民現象の世界的拡大にも関わらず、国民国家による移民の管理・統制力は必ずしも減退しないなか、中国朝鮮族と在日朝鮮人を事例にしながら、移民が独自のコミュニティを形成しながら国民国家による排除と包摂の政策に「折り合いながら対抗する」生存戦略を採用している現実を明らかにした。より多様で、かつフラットな関係性を基盤とする市民社会を構成するうえで、多くの知見を提供している。

研究成果の概要（英文）：This study that studied a Chinese Koreans and Koreans from Jeju Island residing in Japan aimed at next two points. Role of Nation-state in the process when emigrant forms national identity Opposition strategy of emigrant for exclusion and inclusion by Nation-state. This study made it clear that: emigrant group constitute network of shared territorial bonding and blood relative between national identity and ethnic consciousness, and, at same time, they constitute original life world while getting on with outside society.

研究分野：移民の社会学

キーワード：移民 ナショナルアイデンティティ 中国朝鮮族 在日朝鮮人 済州島出身者

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進行に伴う移民現象の拡大は、とりわけ中東情勢の悪化によるヨーロッパ各国への急激な移民流入とそれに付随する社会問題とあわせ、移民と国民国家に関する「古くて新しい」問題を浮上させた。すなわち移民の増加は「国民」や「国境」に象徴される国民国家存立基盤に揺るぎをもたらすのか否かという問いであり、少なくとも 21 世紀以降に目撃された移民現象の拡大は、欧米諸国を中心にむしろ国民国家機能の強化あるいは再統合を進めたように見える。移民と国民国家をめぐる問題は、もちろん、移民の発生状況や受け入れ側国民国家の政治的、経済的状况ないし当該移民と国民国家との歴史的関係など、さまざまな背景によって現実的な展開には差異が生じるわけであるが、多くの個別事例の分析とその集積を通じて、一定の傾向を読み取れる可能性がある。

本研究代表者(鄭雅英)は 1990 年代初期以来、中華人民共和国成立前後期における少数民族としての「中国朝鮮族」成立過程と、1990 年代以降の大量の韓国労働移住にともなう民族的な意識動向に注目し、朝鮮族農村社会を研究する林梅(研究分担者)やコリアンのエスニシティを研究する玄善允(研究分担者)らとともに、中国朝鮮族の移動と社会変容に関して広範囲な視野から継続的に調査研究(基盤研究 B(海外) H24-26、「中国朝鮮族の移住労働における女性の役割と「トランスナショナルな家族」の研究」、課題番号: 24402036 など)を行ってきた。また代表者は、済州島現代史を研究する高誠晩(当初の研究分担者)らとともに在日済州人一世の渡日を巡る生活史聞き取り共同調査に参加してきた。こうした実績を前提に、移民として移動するコリアンと国民国家の関係に関心を持つに至った。

2. 研究の目的

本研究はコリアン移民の代表格ともいべき中国朝鮮族と在日朝鮮人の 2 つのエスニックグループを事例に選んだが、とりわけ後者に関しては、同じ在日朝鮮人社会のなかでも同郷出身者間のコミュニティが比較的強く存続し、出身地(韓国済州島)との人的往来を過去に遡っても資料的に追いやすい済州島出身者グループに限定した。

19 世紀後半から中国東北部に移住した朝鮮人は、日本の「満州国」支配期を経て中華人民共和国下で中国のナショナリティを持つ少数民族「中国朝鮮族」としての地位を受け入れた。一方、20 世紀初頭から日本に移住した朝鮮人は、その後も長期間にわたって日本への帰化をせず南北朝鮮いずれかにナショナルな帰属意識を保持する朝鮮(韓国)人であり続けた。しかし改革開放を経た中国朝鮮族は 1990 年代以降、再び国境を超える集団的移動を頻繁に繰り返すようになり、現在(2019 年統計)では中国朝鮮族総人口 180 万人のうち実に 70 万人以上がエスニックマイノリティとして韓国で居住し、日本での定住者も年々増加している。他方で、在日朝鮮人は同時期に日本への定住化と帰化が進んだ。

既存の研究では、移民によるトランスナショナルな「生活圏」の存在や、国民国家による管理・統合の力に対して、移民マイノリティが抵抗・順応・回避など様々な手段を用いて自集団の権益を守ろうとする「生存戦略」や「自己統治」といった概念が提起されている。こうした点からみると、移民であるコリアンマイノリティは、中国と日本、南北朝鮮という「国家」群に翻弄されながらも、その現居住地や出身地のいずれかの「ネーション(国民)」意識の中に無条件で回収されたわけではないことを推測させる。この点に関し、中国朝鮮族と在日朝鮮人(済州島出身者)のナショナルな意識変容と居住地国家の移民・マイノリティ政策とを対照的に分析することで、移民と国民国家の関係を移民の視点から再検討しようとするのが本研究の狙いである。

3. 研究の方法

「ネーション（国民）」意識をテーマにした聞き取り調査（中国、韓国、日本）と文献資料調査を並行し、調査研究結果は公開的な研究会やシンポジウムを開催して社会的共有を行った。実施概要は以下のとおり。

中国朝鮮族集住地である延辺朝鮮族自治州、黒竜江省牡丹江市、同・東寧市、同・寧安市における朝鮮族学校教育とエスニック意識の関連、コリアン伝統習俗の維持に関わる諸活動に関する現地調査を行なったほか、大阪市内において在日朝鮮族から日本における経済活動および子供の教育に関する口述聞き取り調査をおこなった。延辺大学の複数の研究者（朝鮮族教育および朝鮮族移住史の研究者）との懇談を行なった。

済州島出身者の居住する大阪、東京および仙台において、済州島出身者コミュニティ（同郷親睦会など）の歴史と活動の現状について口述調査を行った。また、済州島現地における在外済州人を含めたコミュニティ（学校同窓会、同郷親睦会ほか）の歴史と活動状況、現地マスメディアに見る同郷人コミュニティの相互関係、および済州4・3研究所理事との懇談を行った。

延辺朝鮮族自治州ほか中国東北地方の研究機関、図書館における朝鮮族移住史と改革開放後の韓国移住に関する資料収集と、国・ソウル済州島の研究機関における在日同法関連の資料収集、および各資料内容の解析を行った。

各年度2～3回の研究内容共有を目的とするクローズドの内部研究会を開き、研究進行の調整を行なった。

4. 研究成果

1) 研究代表者・鄭雅英は、主要なテーマとして第2次世界大戦と国共内戦終了後に、中国に移民者として生活していた朝鮮人が、どのような経緯で中国国籍を有する「中国朝鮮族」というステータスを受け入れたのか、その契機の一つである1949年1月中国共産党東北局が事実上主催した「民族工作座談会」に着目した。この会議では、中国東北部（満州）における中国共産党指導抗日パルチザンに参加した朝鮮人幹部から、東北最大の朝鮮人集住地域である延辺を前年9月に成立したばかりの朝鮮民主主義人民共和国に帰属させるべきだとの意見が出て、激論になったと伝えられる。主として19世紀後半から中国領内に移民した朝鮮人は、中国の帰化政策に応じた一部を除いて、長いあいだ事実上の無国籍状態にあったが、国共内戦時に中国共産党は東北解放区に居住する朝鮮人に対し、中国人と平等の土地分配を行い朝鮮人の安定的な定着を図るとともに、中国内少数民族としてのナショナリティ養成を進める方針をとる。一方で、祖国解放の夢を東北抗日闘争に賭けた朝鮮人革命家にとり、延辺（間島）の民族自決は中国共産党が1920年代から繰り返した「約束」だったと見なしていた。土地改革を前後した中国共産党の極左的「整風」に対する嫌悪や、平壤政権樹立に伴うコリアンナショナリズムの高揚もあり、1949年民衆工作座談会は、中国のナショナルな国民意識受容を迫るマジョリティ（漢族）と、移民者エスニックマイノリティに内在したコリアンとしてのナショナルな意識の衝突が可視化した、数少ない歴史的現場だったことが明らかにされた（鄭雅英「国共内戦期中国東北朝鮮人のナショナルな帰属意識 - 延辺帰属論を中心に」『北東アジア地域研究』第26号, 2020）。この移民と国民国家間の意識を先鋭的に浮かび上がらせた問題解析は、以後、中国の反右派闘争や文化大革命時の状況を対象に継続されなければならない。

2) 研究分担者・林梅は、中国朝鮮族の集住地域で朝鮮族村落・村民を対象にした現地調査とイ

インタビュー、および収集資料の分析を行った。その結果、

人口流出が顕著な朝鮮族村落を対象に、村の観光実践とそれによる村の活性化の実態に関する詳細な調査からは、村の人びとや少数民族村の「受動的な立場」ではない、行政やマジョリティとの協力関係やそれらの取り組みという主体的な運営が確認された(林梅,『『留守』を生きる村 中国東北地域の朝鮮族村の観光化に着目して』南裕子・閻美芳編『中国の「村」を問い直す 流動化する農村社会に生きる人々の論理』明石書店, 2019.。』)。

さらに中国朝鮮族の家族の墓地とそれに関連する葬送を事例に、均質な国民を前提とした国家政策と伝統的文化の齟齬・軋轢を乗り越えるために、家族が編み出した方策と実践に注目した調査からは、民族的側面としての葬送・葬礼や国民的側面としての政治政策は生活環境を構成する一要素にすぎず、「生と死」のつながりを生きる人びとが状況に応じて利用だけでなく、変更を加えたり対応策を講じたりする対象であるということが明らかになった(林梅,『「生と死」のつながりを生きる人々 中国朝鮮族の生活者としてのアイデンティティ』東アジア研究』第70号,大阪経済法科大学アジア研究所)。

上記の調査研究によれば、人びとの社会生活の営みは民族集団や国民としてというよりは、地縁や血縁原理で社会的な紐帯を創造し、その家門や村落などの自集団の一員として、外集団との関係を築いていくことであり、その関係構築において様々な齟齬や矛盾に折り合いをつけて衝突や対立を避ける「平和裡」の解決策を模索・実践することであるということが示唆されている。

3) 研究分担者・玄善允と研究代表者・鄭雅英は、在日済州島出身者における本国と日本社会を切り結ぶコミュニティの過去と現在の調査・分析からそのエスニックな意識の動向を探ろうとした。

まず玄善允は、済州島社会の事実上の骨幹をなしてきたとされる眷党(クエンダン、祖先祭祀を共にする父母両系の親族、ないしその繋がり)といコミュニティに着目し、日本に移住した在日済州島出身者との関連を調査した。眷党的な済州の伝統的家族・社会関係と文化は、渡日移住した済州人一世には確実に受け継がれ彼ら彼女たちは、それを糧に生き延びたとも言える。と在日済州島出身者一世たちは日本の社会の中で暮らしてはいたが、その多くはその社会の限定された地域や階層に押し込まれ、言わば「スラム」もしくは「ゲッター」での生活を余儀なくされ、たとえば日本の経済構造の末端に位置しながらも、日本人社会との実際的な接点は主従的経済関係の一点に限られ、それ以外の生活全般は在日朝鮮人、とりわけ在日済州人が保持していた済州島における地縁血縁関係の延長上にあり、それに大きく依存して暮らしていた。

つまり、日本の大都市の中の「在日のムラ」、厳密には「在日済州人のムラ」で暮らしていた。そして、冠婚葬祭、その他の季節折々のイベント、政治集会に至るまで、主に済州人の地縁血縁のネットワークを核として、日本人は言うまでもなく朝鮮の本土出身者とも疎遠で別個の形式で営まれていた。そのシンボルの一つが、女性を中心としたシャーマニズムのクツ(巫俗祭儀)であったが、1960年代を転換期とする世代交代もあって、眷党的コミュニティとその象徴たるシャーマニズム的風俗は、その後には急速に衰退する。玄は、現代の済州島における眷党文化の変質の一つとして高校同窓会や地元マスメディアで盛行する「祝意広告」の人的連関性を調査し、その中における渡日済州島人の位置を明らかにしようとした。中間的結論として玄は、以下を指摘する。朝鮮半島という「中心」からすれば、済州人も中国朝鮮族も言わば「辺境人」であり、在日済州人と在日朝鮮族との類似性がある。それぞれの集団の枝分かれとも言うべき「在日」なので、両者ともに「二重の辺境性」を「宿命」づけられていることになる。ただし、そうした類似性だけが比較の欲望を刺激するわけではない。むしろ多様な「差異点」、言い換えれば、数々

の「変数」を想定して、その変数が上述の類似性を掻き消して、まったく正反対の集団のように映る現況をもたらしたということの証明を試みようとしている(玄善允「済州現地と在日における着党(クエンダン)文化の現況 祝意広告と同窓会を事例に」朝鮮族研究学会 2019 年度学術大会シンポジウム報告用ペーパー)。

鄭雅英は、1948 年済州島で勃発した 4・3 抗争(国家分断阻止を掲げた左翼武装蜂起と、大韓民国軍警および駐留米軍の関与した市民虐殺)の中核的役割を担った人物の中の多くが、日本植民地時代に日本への渡航歴があり、かつ日本の急進的労働運動や地下学生組織に関わった経験を持つことに着目し、日本労働運動経験者の 4・3 抗争における役割、植民地期に始まる在日済州人のコミュニティとして長く存続する同郷親睦会の歴史と現況、とりわけそのコミュニティと解放後本国に帰国した左翼系人士との接点を明らかにしようとした。中有間的結論として、日本における労働人同経験者は、帰国後の 4・3 抗争では「穏健派」ないし武装蜂起に否定的な立場を取った者が目立ち、1930 年を前後する日本の急進的労働運動参加と厳しい被弾圧経験が、比較的広い視座(国際主義)を養成し、済州島現地の運動に一定の影響を与えたこと、現在に続く同郷親睦会が植民地期に単なる相互親睦にとどまらず、経済生活上の相互依存関係や自生台の教育、あるいはコミュニティの物理的防衛の役割を担っており、宗主国日本の国内にありながらもコミュニティ単位の日常生活が日本のナショナルな意識への回収を強く阻んだ可能性、および解放後 4・3 につながるエスニックマイノリティの社会意識を醸成した事実を部分的に考証している(鄭雅英「済州島 4・3 と在日同胞社会 - 沈黙から追悼まで」2018 統一人文学世界フォーラム「植民地と内戦が残した傷跡、コリアンの差異と共通性」報告ペーパー 2018/10/10、鄭雅英「同郷親睦会の活動-在日済州人コミュニティの特徴と変容」伊地知紀子ほか編著『済州島を知るための 55 章』明石書店、2018)

以上の研究成果の多くの部分は 2019 年度朝鮮族研究学会との合同により「コリアンの移動とネットワーク」をテーマにした国際学術シンポジウムを開催し、科研メンバー 3 名の参加の報告、コメントに反映させ、研究内容の総括に替えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 林梅	4. 巻 第70号
2. 論文標題 「「生と死」のつながりを生きる人々-中国朝鮮族の生活者としてのアイデンティティ」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『東アジア研究』	6. 最初と最後の頁 31, 45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林梅	4. 巻 第5輯
2. 論文標題 「エスニック集団とアイデンティティ-在日中国朝鮮族の生活実践に着目して」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日本語文化研究』	6. 最初と最後の頁 420-428
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林梅	4. 巻 第48号
2. 論文標題 書評「菊池真純著『農村景観の資源化・中国村落共同体の動態的棚田保全戦略』」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『村落ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 46, 47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鄭雅英	4. 巻 60号
2. 論文標題 中国朝鮮族の昨日と今日（上）- もう一つのコリアン社会	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『アヒラン通信』	6. 最初と最後の頁 14, 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鄭雅英	4. 巻 61号
2. 論文標題 中国朝鮮族の昨日と今日(中) - 中国朝鮮族教育の歴史と現況	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『アリラン通信』	6. 最初と最後の頁 18, 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鄭雅英	4. 巻 1
2. 論文標題 「済州島4・3と在日同胞社会—沈黙から慰霊まで」(朝鮮語)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 2018統一人文学世界フォーラム論文集	6. 最初と最後の頁 43, 56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玄善允	4. 巻 69号
2. 論文標題 「金石範著『火山島』の言語の<異様さ>について 表層からの『火山島』へのアプローチ」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東アジア研究	6. 最初と最後の頁 1 - 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玄善允	4. 巻 7号
2. 論文標題 「金学鉄と尹東柱、二人の文学者の帰属と日本における受容の対比などについて」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 朝鮮族研究学会誌	6. 最初と最後の頁 47 - 61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 鄭雅英
2. 発表標題 「済州島4・3と在日同胞社会—沈黙から慰霊まで」
3. 学会等名 2018統一人文学世界フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 玄善允
2. 発表標題 『済州歴史紀行』の翻訳書刊行を契機に
3. 学会等名 青丘文庫研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 玄善允
2. 発表標題 南玉京著『第2のコリアン・ディアスポラ 中国朝鮮族の国内移動とコミュニティ形成』（創土社、2018年刊）への書評
3. 学会等名 朝鮮族研究学会2018年度第4回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林梅
2. 発表標題 「越境性を問う」
3. 学会等名 日中社会学会第29回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林梅
2. 発表標題 「エスニック集団とアイデンティティ 在日中国朝鮮族の生活実践に着目して」
3. 学会等名 第5回中日韓文化比較研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林梅
2. 発表標題 「「留守」を生きる村」
3. 学会等名 朝鮮族研究学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高誠晩
2. 発表標題 「国境を越える 移行期正義 虐殺後のディアスポリックな弔いの実践を事例に」
3. 学会等名 13th ISKS International Conference of Korean Studies(Auckland, New Zealand)（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高誠晩
2. 発表標題 「死後処理の越境性 済州4・3事件以後における<暴徒>と<密航者>による孤軍奮闘」
3. 学会等名 2017年韓国文化人類学 会第58次定期学術大会（韓国・済州道）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高誠晩
2. 発表標題 「反共國家韓轉型正義變遷 以濟州四三事件的 清算 為例」
3. 学会等名 「文化存亡興衰的未來挑戰：族群和解/共生的可能」 研討會議（台灣・台北市）（國際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 林梅・南裕子・閻美芳ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 256
3. 書名 『中国社会研究叢書――中国の「村」を問い直す』	

1. 著者名 玄善允	4. 発行年 2018年
2. 出版社 同時代社	5. 総ページ数 388
3. 書名 翻訳『濟州歴史紀行』（李映権著）	

1. 著者名 鄭雅英・梁聖宗・伊地知紀子ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 368
3. 書名 『濟州島を知るための55章』	

1. 著者名 玄善允	4. 発行年 2017年
2. 出版社 同時代社	5. 総ページ数 419
3. 書名 『人生の同伴者 ある在日家族の精神史』	

1. 著者名 林梅 (荻野昌弘・李永祥編)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 192
3. 書名 『中国雲南省少数民族から見える世界 国家のはざまを生きる民』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	林 梅 (Lin Mei) (20626486)	大阪経済法科大学・アジア研究所・研究員 (34427)	
研究分担者	高 誠晩 (ko Seong man) (40755469)	立命館大学・衣笠総合研究機構・研究員 (34315)	
研究分担者	玄 善允 (Hyun Sunyoon) (80388636)	大阪経済法科大学・アジア研究所・教授 (34427)	